

地域の存続を巡る存在論的不安に関する研究

羽鳥 剛史 (愛媛大学 社会共創学部, hatori@cee.ehime-u.ac.jp)

A study on residents' existential anxiety for the survival of a region

Tsuyoshi Hatori (Faculty of Collaborative Regional Innovation, Ehime University)

要約

我が国では、特に地方部や中山間地域において、若年層を中心とした人口流出によって、地域存続の危機に直面しているところが少なくない。本研究では、この問題に対して、地域存続を巡る「不安」という観点から、地域住民が抱える不安の実態を把握すると共に、住民がその不安と向き合いながら、地域存続の危機を自律的に乗り越えていくための実践的展開の可能性を探ることを目的とする。その際、人間の生の実践における本質的な契機として「不安」を位置付けたキルケゴールの論考を取り上げ、そこで論じられた存在論的不安の概念に着目する。本研究では、以上の目的の下、愛媛県内の一つの中山間地域を対象として、住民 ($n=60$) へのインタビュー調査を実施し、地域やコミュニティの存続や消滅の可能性について彼らがどのような不安を抱え、その不安とどのように向き合っているかについて把握することを試みた。その結果、住民において、たとえ地域が衰退しつつあるとの認識を有していたとしても、その精神的・肉体的負担故に、そうした危機的事態やそれに対する不安に必ずしも向き合うとは限らないことが示された。その上で、地域の消滅という可能性を認識した上で、当該地域に帰り農業を始めた一名の方の言説に着目し、その経験を基にして、地域の存亡を巡る不安がその危機に対する先駆的な覚悟へと弁証法的に深化する可能性について議論した。そして、そうした不安の弁証法的深化は、過去の経験に裏打ちされた「地域の消滅」に関する現実認識の下、地域の存続に向けて自分が為すべき事の「生の決断」を地道に重ねていく中で成立し得ることを指摘した。最後に、本研究の知見が、地域やコミュニティの諸実践や活力増進において示唆する点について考察した。

キーワード

存在論的不安, 地方消滅論, キルケゴール『不安の概念』, 経験的—現象学的方法, 弁証法

1. はじめに

我が国では、現在、本格的な人口減少時代を迎える中、「地方消滅」に関する議論が徐々に真実味を帯びつつある(増田, 2014)。近年の地方消滅論の端緒となった、日本創生会議の人口減少問題検討分科会が発表したレポート(所謂「増田レポート」)は、全国の市区町村のほぼ半数に相当する 896 の市区町村を「消滅可能性都市」に指定し、大きな国民的関心を集めた(増田他, 2013)。本レポートの真偽を巡っては賛否両論があるものの(c.f. 伊地知, 2017)、いずれにせよ、全国各地において、地域やコミュニティが将来的に活力ある形で存続できるか否かが重要な課題となっていることには相違ないものと言える。特に地方部や中山間地域においては、若年層を中心とした人口流出によって、過疎化や高齢化が加速化し、地域全体やコミュニティがその存続の危機に直面しているところが少なくない。

それでは、地域やコミュニティがその存続の危機を迎えつつある中、当該地域に暮らす住民はこうした危機的事態をどのように受け止めているのであろうか。本稿では、この問題に対して、地域の存続を巡る「不安」という観点から検討を加えることとしたい。一般に「不安」とは「気がかりで落ち着かないこと」(大辞泉)を意味しており、この意味において、地域住民にとって、自分達

の暮らしを支えてきた地域やコミュニティが消滅するかもしれないという可能性は、根本的な「不安」に他ならないものと言える。しかし、地方消滅を巡る従来の議論においては、地域やコミュニティ存続の危機に対して住民がどのような不安を抱えているかについては十分に検討されてきたとは言いがたいように思われる。実際に、地方消滅論に対して、こうした議論が、ともすると住民の不安を過剰に煽ることにもなり兼ねないことに厳しい批判が向けられている(小田切, 2014; 山下, 2014)。

他方で、近年、「安全・安心な社会」という理念の下、防災、防犯、健康・医療、教育、安全保障等、様々な分野において、地域住民の安全・安心な暮らしをいかにして実現できるかが議論されている(c.f. 国土交通省, 2011; 日本学術会議, 2005)。こうした議論は、地域社会における住民の不安を軽減する上でも重要な示唆を与え得るものと言える。その一方で、地域社会がその衰退の危機にありながら、住民の不安軽減を無理に図ることは、現実問題の根本的な解決には繋がらない可能性も懸念される。そもそも、地域存続の危機的事態にあっては、住民が一定の不安を持つことはむしろ正常な反応であるとも言える。さらに言えば、住民は、そうした不安と真摯に向き合うからこそ、自分達の地域やコミュニティが直面する諸課題に対して、その解決に向けて尽力する可能性が生まれるものと考えられる。この点を踏まえると、「安全・安心」だけを求めて、地域住民が抱える不安の一面的な解消を目指すことは、住民自身がその主体的な活動を通じて地域存続の危機を自律的に乗り越えていくための活力を削ぐことにも

なり兼ねない。

この様に、地方消滅論においても、或いは安全・安心な社会に関する議論においても、地域やコミュニティの存続を巡る不安と住民自身がどのように向き合っているかについて十分に考慮されてきたとは言い難い面がある。しかし、こうした観点を考慮しないまま、「地方消滅」や「安全・安心な社会」を唱えたとしても、住民自身の主体的な活動を通じて、地域存続の危機を克服するための自律的・実践的な展開を図っていくことは難しいように思われる。

以上の問題意識の下、本研究では、地域の存続を巡って住民が抱えている不安の実態を把握すると共に、住民がその不安と向き合いながら、地域存続の危機を自律的に乗り越えていくための実践的展開の可能性を探ることを目的とする。その際、人間の不安について論じた先駆的論考として、キルケゴール（1951）の『不安の概念』を取り上げ、そこで論じられた存在論的不安の概念に焦点を当てる。次章で述べる通り、キルケゴールの議論は、人間の生の実践における本質的な契機として「不安」を位置付けており、本研究において、住民一人一人が地域存続を巡る不安と向き合いながら、そうした危機を自律的に乗り越えていくための実践的な方向性を検討する上でも示唆するところが少なくない。本研究では、そうした人々の存在論的不安の意味や内容を把握するための方法として、不安についての人々の語りに着目する。そして、この方法に基づいて、愛媛県内の一つの中山間地域を対象として、住民へのインタビュー調査を実施し、彼らの語りの中から、地域の存続を巡る存在論的不安の意味や内容を明らかにすることを試みる。こうした検討を通じて、地域やコミュニティの自律的な活動やその活力増進に向けた実践的な示唆を得ることに本研究の狙いがある。

2. 本研究の基本的考え方

2.1 不安の概念

人間の不安について論じた先駆的著作として、キルケゴール（Soren Kierkegaard, 1951）の『不安の概念』を挙げることが出来る。デンマークの哲学者キルケゴールは、本書をはじめ一連の著作において、圧倒的な自由を獲得しながら不安や絶望に捉われる近代的人間の生を実存的に描き、ハイデガーやヤスパースをはじめ、その後の実存哲学や生の哲学に多大な影響を及ぼした。本書において、キルケゴールは、「不安」を「自由の眩暈（p.104）」と捉えている。すなわち、人間の生は、未来の可能性に向かって絶え間なく自己を形成することが求められるが、その未来は未だ実現されていない「無」である。彼は、そうした無なる可能性を前にたじろがざるを得ない状態を「不安」と呼んでいる。この様に、キルケゴールによれば、人間は、特定の事態を予期して不安を抱くというより、自分自身や自分達の社会の将来が未知なることそれ自体に不安を抱くのである。

この様なキルケゴールの不安に対する考え方の特徴は、人間の生がその可能性に向けて自己を展開する営みの中

に、そこに本来的に付随する契機として不安を位置づけている点にある。そこでは、不安は必ずしも除去すべきものではなく、むしろそうした不安と真摯に向き合うことが求められる⁽¹⁾。それ故、キルケゴールは「不安を正しく抱くことを学んだ者は、最高のことを学んだ（p.278）」と述べているのである。その一方で、キルケゴールによれば、自らの不安に真摯に向き合わない態度は、人間の生そのものの否定を意味すると共に、そうした態度を取っても不安そのものは解消せず、その生の営みの中で常に顕在化する可能性を有している。そのため、彼はこのような態度を「無精神性の不安（p.164）」と呼んだのである。

この様に、キルケゴールの論じる不安は、人間の生や存在にとって本質的となる存在論的意味を有している。この点を強調して本稿では、こうした存在論的意味を伴う不安、即ち人間の生や地域社会の未知なる可能性に向けられた不安を特に「存在論的不安（existential anxiety）」と呼称する。上述の議論を踏まえれば、地域社会の将来的な存亡を巡っても、一方では、そうした不安と真摯に向き合い、その存続に向けて尽力する場合もあれば、他方では、そうした不安から目を逸らし、無関心に振舞う場合もあり得る。この様に、地域の存続を巡る存在論的不安は、当該地域がその存続の危機を克服できるか否かという問題と深く関連し得る重要な概念であると考えられる。

なお、キルケゴールが論じた存在論的不安は、自己の生の可能性に向けた一個人の不安（「私の不安」）を意味しており、本研究においても、この考え方に基づき、あくまでも一人一人の個人が地域の存続を巡ってどのような不安（「私の不安」）を抱いているかについて検討する。ただし、地域の将来的な可能性を前にして、その個人が「自己の不安」として配慮する範囲は、一方では「いま・ここ」の自分だけに留まる場合もあれば、他方では遠い過去から将来に亘る地域全体に及ぶ場合もあり、連続的な広がりを持つものとする⁽²⁾。この様に本研究は、キルケゴールの考え方と同様に、個人が「自己」の可能性に対して抱いている不安に着目する一方、その不安の対象である「自己」の可能性が、当該個人の配慮する範囲に応じて地域全体にも及び得るものと想定する。こうした想定の下、地域の存続を巡る存在論的不安について検討することとした。

2.2 不安に関わる心理学的方法

それでは、地域住民が抱える不安の存在論的な意味をいかにして把握することが出来るのであろうか。この点について検討する上で、本節ではまず、従来の心理学における不安の捉え方とその限界を説明し、その上で、本研究の方法論について述べる。

さて、これまで心理学の分野を中心にして、不安やその心理機構に関する数多くの研究が蓄積されてきた。心理学における「不安とは何か」に関わる中心的な考え方として、以下のDustin（1969）の説明を挙げることが出来る。

「我々が不安を理解するためには、まずそれと関連する

情動である恐怖 (fear) について説明しよう。恐怖は、危険によって生起する情動である。危険が増大するにつれて、恐怖もまた増大する。(中略) 恐怖は危機的な状況の中では自然なものであり、そのため我々にとって不可解なものではない。しかし、こうした情動的な反応を引き起こすに足る十分な危険がないにも関わらず、同様の情動反応が生じた場合、それらは不安と呼ばれる。そして、こうした情動は確かに不可解なものである。(pp.1-2)

以上の考え方において、不安は、恐怖の特殊な形態として理解されており、特に我々外部の観察者には原因の特定できないような恐怖と見なされている。さらに、Dustin は、不安や恐怖の現象を理解する上で、「状況 (situational realm)」「内的情動 (inner emotional realm)」「生理反応 (bodily realm)」という3つの領域を提示し、個人が特定の「状況」に曝された時、その個人において不安や恐怖という「情動」が生起し、その結果として心拍の亢進等の「生理的反応」が生じると仮定している。従来の心理学の多くは、こうした前提の下、不安や恐怖が生起する因果的な心理機構を明らかにすることを試みてきた。

しかし、Fisher (1989) が指摘する通り、従来の研究では、個人における「不安である (being anxious)」ことの意味を理解する試みは殆ど為されていない。上述した Dustin の説明においても、不安はあくまでも観察者にとって正当な原因が特定できない不可解な現象として捉えられている。そこでは、不安を感じている本人がその「不安であること」をどのように意味づけ、それを理解しているかについては考慮されていない。従って、従来の方法論では、個人の不安がその生の営みの中でどのような意味を有しているかという存在論的な意味を理解することが難しいものと考えられる。

2.3 不安に関わる経験的—現象学的方法

Fisher (1989) は、以上に述べた心理学的なアプローチの課題を克服する方法として、経験的—現象学的方法 (empirical-phenomenological approach) の重要性を説き、個人の経験の中から「不安である」ことの意味を明らかにするための方法論を提案している。この方法では、「不安である」ということの意味を個人がそれを経験するように理解することを試みる。具体的には、研究者と対象者が互いに協力し合いながら、対象者が「不安であること」を回想して、研究者がその内容を記述する。その際、「不安である」という状態を、個人とその個人における経験とは独立した状況との間の因果関係ではなく、個人が自分の置かれた状況に意味を付与するシンボリックな体系の現れとして捉える。そして、その個人にとって、「不安であるとはどういうことか」「その人が不安である時、いかにその状況を体験し、現実のものとして生きるか」を問う。Fisher (1989) では、複数の対象者に対してこれらの問いについて回答してもらい、そこで得られた様々な経験内容から、一人一人の不安経験やその相違点を相対的・遠近的に捉えると共に、皆が了解可能な形で不安経験の共通構造を見出すことを試みている。具体的には、

以下の手順に沿って、不安の心的構造が分析される。

- 不安を経験した個人の視点から、その言説をストーリーとして記述する。
- 研究者の視点から、そのストーリーを再解釈し、その意味を考える。
- 「個人がその状況において経験した「不安である」ことの心理学的な意味は何か」という視点から、それぞれの個人が各自の個別の状況において経験した不安に関する構造的記述 (situated structural description) を行う⁽³⁾。
- その上で、「人々が経験するかもしれない可能性として「不安である」ことの心理学的な意味は何か」という視点から、人々の不安に関わる一般的な構造的記述 (general structural description) を行う⁽⁴⁾。

こうした方法を通じて、人々において「不安であること」がどのような意味を持っているかを理解することが期待できる。

2.4 本研究の方法

この様に、Fisher (1989) は、人々の語りの中から、彼らの経験に即してその不安の心理学的な意味を明らかにする方法論を提案している。ただし、Fisher (1989) の方法では、人々において「不安であること」がどのような心理学的意味を持つかについて検討している一方、特段、地域社会の存続を巡る不安やその存在論的な意味について検討している訳ではない。また、前述の通り、この方法では、異なる不安の経験主体の間で了解可能な不安の構造を抽出することに主眼が置かれている。しかし、キルケゴールが論じる存在論的不安の概念は、自己がその生の可能性とどのように向き合うかという問題と深く関わっており、その個人の生のあり様に依りて様々な様態を取り得るものと考えられる。そのため、そうした存在論的不安について共通了解可能な構造的記述を一意的に導き出すことは必ずしも容易ではないと思われる。

本研究では、以上の点を考慮に入れた上で、地域の存続を巡る存在論的不安の意味や内容について検討する。この目的の下、一般住民を対象にインタビュー調査を実施し、その言説の中から、地域やコミュニティの存続やその消滅の可能性について、彼らがどのような不安を抱え、その不安とどのように向き合っているかについて、可能な限り彼らの経験に即して把握することを試みる。その際、調査対象者が語る不安の経験について、彼らが地域社会の存亡やそれを巡る不安とどのように向き合っているかという観点から、いくつかのタイプに整理分類し、その存続論的な意味内容について比較検討する。特に、地域やコミュニティの存続に対してより強い不安を感じている調査対象者と、その反対に不安を感じていない調査対象者に着目し、その言説を対比的に分析する。この意味において、本研究では、地域の存続を巡る存在論的不安に関して、必ずしも一般的・平均的な言説を取り上げるのではなく、むしろ“特異な”言説を取り上げ

る。本研究においてそうしたアプローチを採用する理由は、本研究では、地域の存続を巡る存在論的不安に関する共通構造を抽出することに主眼を置いている訳ではなく、そうした不安と向き合うことの存在論的意味を理解することを目的としており、不安とより深く向き合っていると解釈される言説とそうでない言説を比較的に分析することを通じて、そうした理解がより鮮明な形で得られるものと期待されたためである。

3. インタビュー調査の方法

本研究は、愛媛県愛南町の一つの中山間地域（以下、「X地域」と呼称する）の住民を対象に実施したインタビュー調査の結果に基づいている。この調査は、地域の暮らしの中で住民がどのような不安を抱えているかを把握することを目的として実施したものである。そのため、このインタビューは、必ずしも「地域社会やコミュニティの存続」を直接的なテーマとしたものではない。ただし、調査対象者において、地域の暮らしに関わる不安について述べる中で、自分達が暮らす地域社会やコミュニティが衰退しつつある現状やその消滅の可能性について言及する場合が少なくなく、本研究では、特にそうした言説に着目して検討を進めることとした。

3.1 調査対象地の概要

愛媛県のX地域は、同県の最南端に位置する愛南町の内陸部に位置している。地域全体の人口は約800名であり、10数個の集落から構成される。地域の主要産業は農林業であり、特に柑橘類の生産が盛んである。しかし、地域内の人口減少が深刻化しており、地域全体の人口は、過去10年間で20%程度減少している。また、少子・高齢化も進んでおり、高齢化率が75%、年少者が0人という集落も存在している。その結果、耕作放棄地や空き家等も目立ってきており、秋祭り等の行事や各種のコミュニティ活動等の存続も深刻な課題となっている。

こうした状況を受けて、この地域では、地域住民を中心にして地域づくり組織を設立すると共に、地域の課題解決に向けた地域づくり計画が策定された。この計画の中で、「安全・安心な地域づくり」が今後の重点事業の一つに位置づけられており、地域住民の不安や心配事を把握し、住民が安全に安心して暮らせる地域づくりを目指すことが定められた。今回の調査はこの計画の下で実施された。

3.2 調査対象者

地域内の性別・年齢構成を考慮して60名の住民を選定した。調査対象者の内訳は、「高校生(4名)」「20代(4名)」「30代(8名)」「40代(8名)」「50代(8名)」「60代(14名)」「70代(14名)」であり、各世代において男女比が均等になるように選定した。調査対象者の平均年齢は53.02歳(標準偏差18.72歳)であり、最小15歳、最大78歳であった。調査対象者の職業構成を図1に示す。

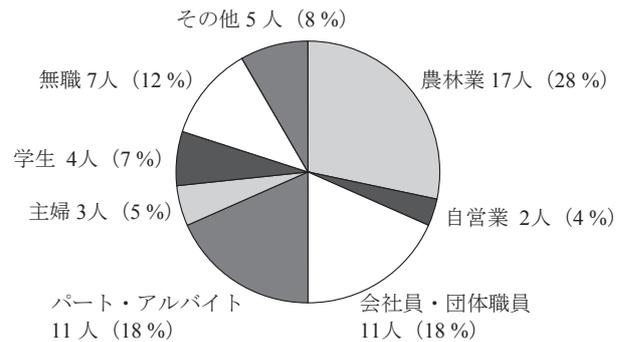


図1：調査対象者の職業構成

3.3 インタビュー調査の手順

2016年11月18日から11月23日にかけて、本稿の著者と著者の研究室の学生3名(修士学生2名と学部4年生1名)が2名ずつ2班に分かれて、それぞれの調査対象者に対してインタビュー調査を個別に実施した。調査時間は一人当たり大よそ30分から1時間程度であり、当該地域の公民館あるいは調査対象者の自宅において行った。

本調査では、前章で述べた方法に基づいて、地域の暮らしの中で不安を感じている状況について、出来る限り詳細に語ってもらうことをお願いした。その際、「何が不安であったか」「なぜ不安に感じたか」「その不安にどう向き合ったか」「その結果どうなったか」という点を中心に尋ねた。調査対象者が語った内容は全て記録した。その上で、それぞれの調査対象者が語った言説内容を基にして、その対象者が地域の暮らしの中でどのような不安を抱えているかについて、それぞれ100字から300字程度の概要を取りまとめた⁽⁵⁾。

また、4.3で述べる通り、今回の調査対象者の中の一名(以下のC氏)については、後述する理由により、2017年8月7日、追加的なインタビュー調査(1時間半程度)を実施し、更なる言説を収集した。

4. 調査結果と考察

4.1 言説内容の整理分類

今回のインタビュー調査から作成した調査対象者ごとの記述内容を基にして、地域の暮らしに関わる不安について話されたテーマを、表1に示す通り、「地域の存続」「人口減少・少子高齢化」「健康・介護」「子育て」「土地」「仕事・生業」「産業・雇用」「文化・交流」「病院・医療」「移動・交通」「環境・災害」「その他」に大別して整理した。表中、各テーマについて言及した言説数を示している。ここで、一人の調査対象者が複数のテーマについて述べている場合もあるため、表中の言説数の合計と調査対象者の人数は一致していない。この表に示す通り、地域の暮らしに関わる不安について語る中で、【地域やコミュニティの存続・衰退】の可能性について直接的に言及した人は60名中10名であった。ただし、【地域行事の存続】、【人口減少】、【子供の減少】等、地域やコミュニティの衰退と関連する

表1：不安のテーマ

カテゴリー	テーマ
地域の存続	【地域やコミュニティの存続・衰退】(10)
人口減少・ 少子高齢化	【人口減少】(3) / 【子供の減少】(15) / 【若者の減少】(2) / 【高齢化】(5) / 【地域のまとめ役不在】(1)
健康・介護	【自分と家族の健康】(16) / 【自分と家族の介護】(4) / 【自分の死】(1)
子育て	【子育て環境全般】(3) / 【子供の帰郷】(4) / 【学校の存続】(3)
土地	【空き家】(3) / 【耕作放棄地】(3)
仕事・生業	【家業の後継ぎ】(9) / 【生業の維持】(4)
産業・雇用	【雇用の確保】(11) / 【女性の雇用】(2) / 【産業の衰退】(4)
文化・交流	【地域行事の存続】(14) / 【人付き合いの希薄化】(8) / 【男女の出会い機会の不足】(4) / 【若者の遊び場の不足】(2)
病院・医療	【医療サービスの不足】(11) / 【病院の存続】(3)
移動・交通	【車の運転】(10) / 【公共交通の維持】(4) / 【道路整備】(3)
環境・災害	【環境問題】(2) / 【自然災害】(5) / 【獣害】(2)
その他	【行政】(1)

注：括弧内の数字は、そのテーマに言及した言説数を表す。

課題について述べる言説が多く見られた。また、【自分と家族の健康】や【車の運転】等、個人的な生活上の不安について述べている言説においても、例えば、病院の【医療サービスの不足】や【公共交通の維持】等、地域全体の課題に言及する機会が少なくなかった。

2章で述べた通り、人々が抱える存在論的不安は、本人が自己や地域社会の未知なる将来の可能性をどのように捉えているかという点と関係している。そこで、こうした観点から、調査対象者が語った不安の内容を大きく「心配・願望」「諦め・失望」「覚悟・危機感」「躊躇い・葛藤」「困惑・戸惑い」の5つのタイプに分類した。表2では、それぞれの不安のタイプについて、その発言内容を抜粋した例を示すと共に、そのタイプに該当したテーマを整理している。これらの不安のタイプと調査対象者の言説の分類は、今回の調査者（筆者と3名の学生調査員）が、インタビュー実施後、上述した記述内容を改めて確認し、精査・協議を重ねながら確定した。表2において、第1に、「心配・願望」は、自分の生活や地域社会に関わる将来の不確かな事柄に対して、気掛りや願望を抱くことを意味しており、【自分と家族の健康】や【地域行事の存続】等のテーマについて、その将来を案ずる言説が多く見られた。第2に、「諦め・失望」は、将来の不確かな事柄に対して、「仕方が無い」としてその思いを断ち切ったり、将来への望みを失ったりすることを意味しており、【雇用の確保】や【医療サービス不足】等のテーマについて、諦めや失望を感じている様子が伺える言説が少なからず見受けられた。第3に、「覚悟・危機感」は、将来の不確かな事柄に対して、その起こり得る事態を出来る限り想像し、その事態への

対処を予め講じて心構えを有していることを意味しており、主に【自分の死】や【自然災害】等のテーマに関して、覚悟や危機感を持って対峙している様子が伺える言説が見られた。一方、地域やコミュニティの消滅の可能性に関して、そうした覚悟を抱いていると解釈された言説は1名（以下のC氏）に限られた。第4に、「躊躇い・葛藤」は、将来の不確かな事柄に対して、自分がどのように対処すべきかについて思い悩むことを意味しており、主に【家業の後継ぎ】や【子供の帰郷】等のテーマに関して、どのように振る舞うべきかを悩んでいる言説が見受けられた。第5に、「困惑・戸惑い」は、将来の不確かな事柄に対して、自分がどのように対処すべきかが見当たらず、途方に暮れていることを意味しており、主に【車の運転】等のテーマに関して、そうした困惑や戸惑いを感じている言説が見受けられた。なお、「躊躇い・葛藤」と「戸惑い・困惑」については、【家業の跡継ぎ】や【車の運転】等、個人的な生活上の問題に関わるテーマと直接的に関連する機会が多く、本研究の主眼である地域やコミュニティの存続や消滅に関わるテーマを巡って、こうした不安を抱いていると捉えられた言説は確認されなかった。

次節では、以上の整理分類を踏まえて、地域の存続やその問題に関わるテーマを巡って、「心配・願望」「諦め・失望」「覚悟・危機感」を抱いていると解釈された言説を取り上げ、それらの言説を中心にその不安の内容を検討する。

4.2 地域の存続を巡る不安についての言説

全ての世代において、人口減少、少子高齢化、雇用機会の不足、地域行事の衰退、学校の存続等の地域課題に関連して、地域やコミュニティの存続や衰退を懸念する言説が見られた。以下では、その中で「心配・願望」「諦め・失望」「覚悟・危機感」に相当すると解釈された代表的・典型的な言説として、それぞれA氏（60代・女性）、B氏（60代・男性）、C氏（30代・男性）の3名の語りを選定し、これらの語りを中心にその内容を検討する。

4.2.1 A氏（60代・女性）の言説

A氏は、現在、夫と二人暮らしである。息子は既に独立しており県外で働いている。A氏は夫と結婚してから、35年間、X地域で暮らしてきた。この町が好きで、最後までここで暮らしたいと話しておられた。

『この場所の田園が好きなんです。田植えする前の水を張った田んぼ、稲を植えたばかりの田んぼ、少し育った時の田んぼ、収穫前の黄金色の田んぼ、それ（田んぼを見ること）がすごく好きなんです。（中略）（田んぼを）見ているとイライラしたことも小さい小さいと思うんですよ。そういうのもあって、ここを離れたくないという気持ちがあります。』

しかし、昔に比べて近隣との交流も随分減ったそうである。A氏は、今後この町で暮らしていく中で、近所付き

表2：不安のタイプとその内容

不安のタイプ	不安についての発言内容（例）	テーマ
「心配・願望」 (将来の不確かな事柄に対して 気掛りや願望を抱くこと)	<ul style="list-style-type: none"> いつまで健康でいられるか不安に感じる。(70代女性) 「おこもり」(地域行事)がだんだん寂しくなってきた。(60代女性) 子供が少なくなると、地域行事も無くなってしまわないか。(40代男性) 高校のクラスも10から4に減り、各地区の子供の数が少なくなっており、地域の将来に不安を感じる。(50代男性) 車が運転できなくなった後、バスとかあるのかな。(60代女性) 全体的に若い人が外に出て行ってしまっていない。(60代男性) 	【自分と家族の健康】(16) / 【地域行事の存続】(12) / 【子供の減少】(12) / 【地域やコミュニティの存続・衰退】(6) / 【公共交通の維持】(4) / 【人口減少】(3) / 【自分と家族の介護】(3) / 【学校の存続】(3) / 【家業の後継ぎ】(3) / 【雇用の確保】(3) / 【人付き合いの希薄化】(3) / 【病院の存続】(3) / 【自然災害】(3) / 【高齢化】(2) / 【子育て環境全般】(2) / 【空き家】(2) / 【耕作放棄地】(2) / 【産業の衰退】(2) / 【男女の出会いの機会の不足】(2) / 【医療サービスの不足】(2) / 【車の運転】(2) / 【生業の維持】(1) / 【道路整備】(1) / 【獣害】(1)
「諦め・失望」 (将来の不確かな事柄に対して、「仕方が無い」としてその思いを断ち切ったり、将来への望みを失ったりすること)	<ul style="list-style-type: none"> 母が難病であり地域の病院では安心して診てもらえない。(30代男性) 地域産業が発展すれば活気も出るが、少子高齢化は自然な流れだと思うし、仕方がない。(60代男性) 地域の農業や将来の担い手について、「不安」というよりも“やむを得ない”と感じている。(60代男性) 今後の生活について“不安”というよりも“どうしようもない”と感じている。(60代男性) 	【医療サービスの不足】(9) / 【雇用の確保】(6) / 【人付き合いの希薄化】(4) / 【地域やコミュニティの存続・衰退】(3) / 【子供の減少】(3) / 【高齢化】(3) / 【若者の減少】(2) / 【家業の後継ぎ】(2) / 【女性の雇用】(2) / 【産業の衰退】(2) / 【男女の出会いの機会の不足】(2) / 【若者の遊び場の不足】(2) / 【地域のまとめ役の不在】(1) / 【子育て環境全般】(1) / 【地域行事の存続】(1)
「覚悟・危機感」 (将来の不確かな事柄に対して、その起こり得る事態を出来る限り想像し、その事態への対処を予め講じて心構えを有していること)	<ul style="list-style-type: none"> 将来、自分が車に乗れなくなると大変。ただ、子供たちとその事について話していて、長女が診てくれると言ってくれている。(60代女性) 地震が来た時に備えて、保険に入り、常備品の準備をしている。(50代男性) 自分の死について、遺言やエンディングノートを更新しており、常日頃考えている。(70代女性) 	【車の運転】(3) / 【自然災害】(2) / 【地域やコミュニティの存続・衰退】(1) / 【自分の死】(1) / 【雇用の確保】(1)
「躊躇い・葛藤」 (将来の不確かな事柄に対して、自分がどのように対処すべきかについて思い悩むこと)	<ul style="list-style-type: none"> 子供に帰ってきてほしいと思うが、仕事がないため、直接言えない。(60代男性) 息子に帰ってきてほしいが、子育て環境の良い地域に住んでおり、帰ってきてとは言い難い。(60代女性) 農業の後継者が不足しているけど、親も子供に農業しろとは言い難い。(70代男性) 	【子供の帰郷】(4) / 【家業の後継ぎ】(2)
「困惑・戸惑い」 (将来の不確かな事柄に対して、自分がどのように対処すべきかが見当たらず、途方に暮れていること)	<ul style="list-style-type: none"> 家族の送迎や友達との交流等、全て自分の運転で出来ている。これから車の運転が出来なくなった時、どうしようか。(70代女性) 後継者がおらず、自分の農地をどうしようか。(60代男性) 地域への交通の便が悪い。今のままでは地域に来てくれる人が少なく、地域おこしの障害になる。(70代男性) 	【車の運転】(5) / 【生業の維持】(3) / 【道路整備】(2) / 【環境問題】(2) / 【自分と家族の介護】(1) / 【地域のまとめ役の不在】(1) / 【空き家】(1) / 【耕作放棄地】(1) / 【雇用の確保】(1) / 【地域行事の存続】(1) / 【人付き合いの希薄化】(1) / 【獣害】(1) / 【行政】(1)

注：括弧内の数字は、そのテーマに言及した言説数を表す。テーマ欄では、その言説数が多い順番にテーマを記載した。

合いが希薄になりつつある現状に不安を感じておられた。

『今から年をとっていくのに、ご近所との助け合いが希薄になったのが不安に思います。』

この事に関連して、A氏は、近隣の方々との交流が活発であった頃の様子について話して下さった。

『母（夫の母）が元気な間は、近所のおばあちゃんが四、五人、ほとんど毎日来て、どこかの家でお昼作ったり、持ち寄って食べたりしてたんですよ。それにおばあちゃ

ん達が来れば、私も参加して、何か作ってあげたり、その中に入ってお話を聞いたりしてましたね。そうやけども、親世代が亡くなって、(A氏と同じ)若い世代は仕事してたんで、おばあちゃんは知ってるんだけど、その娘さんを知らないんですね。それで、今はもうほとんど（交流は）無いですね。』

また、地区の伝統行事である「おこもり」についても、集落の高齢化が進む中、続けていくことが難しくなっているようである。

『昔は、地区で「おこもり」っていうのがあって、年に何回かあったんですよ。こっちに来た当時は、それが珍しくて。皆が集まって、当番の人が準備をして、部落の人が集まって、食べたり、飲んだりっていうのがあったんですよ。(中略)今はもうほとんどなくなって、その名残りみたいなのはあるんですけど、昔ほどではないですね。』

この「おこもり」や秋祭りをはじめ、地域の伝統行事が衰退しつつあることについては、A氏の他にも多くの方々指摘しており、その存続を願っていることが窺えた。

ただし、次のB氏の様に、そうした地域が直面する厳しい状況を受け入れているケースも少なからず見受けられた。

4.2.2 B氏(60代・男性)の言説

B氏は、X地域ですべて建設業関係の仕事をしており、現在は妻と二人暮らしである。B氏もまたこの地域の人口減少については強く認識しておられた。

『地域の人口がどんどん減っていきよる。ものすごいよ、減り方が。もう若いもんも少なくなって限られてきとるし。道が狭いとか、まあ荒れてきよるのは間違いない。放棄地とかそういうのが出てくるのも間違いないやろうけん。』

ただし、B氏は、地域の現状に対して、特段不安を感じておられないとのことであった。

『この年になったら、そがい(そんな)に不安というのを感じないねえ』

むしろB氏は、こうした状況を自然の流れとして受け止めておられた。

『人が減っていったら、自然とそうなる(町も衰退していく)。不安というより、なるようになる。もうそんなに期待はしとらん。仕方ないよな。』

B氏の他にも、地域の衰退を認識しつつも、『気が滅入るから、あえて不安に感じないようにしている』という方(60代・男性)もおり、こうした事態に対して不安と捉えていない方が少なくなかった。また、『誰かがしてくれればね(40代・女性)』『町(役場)が考えよるやろう(60代・男性)』という言説も見られ、地域の衰退を自分達の問題として主体的に捉えていない様子も見受けられた。

一方、少なくとも今回の調査においては、地域が存続できなくなるという可能性に対して危機感を抱いている様子が伺えたのは、以下のC氏の言説のみであった。

4.2.3 C氏(30代・男性)の言説

C氏は、X地域出身で地元の高校を卒業した後、県外の大学に進学し、その後、松山で十年ほど出版関係の仕事に勤めた。その後、二年前(2014年)にこの町に帰ってきて農業を始めた。ただし、C氏の実家は元々兼業農家であり、実家で所有していた農地の規模も限られていた。そのこともあって、C氏は農業を始めるに先立ち、松山で二年程掛けて、今後、どのようにしてこの地域で農業を営んでいくかを計画し、その上で帰ってきたそうである。

C氏は、インタビュー冒頭、地域の暮らしの中で不安に思うことについて、

『一切ないです。』

と語っていた。C氏によれば、

『何かしら不安があれば帰って来てないので。』

とのことであった。ただ、インタビューを進めていく中で、C氏が地元に戻ってきた背景に、地域に対する強い思いがあったことを窺い知ることが出来た。

『僕が前職でこっちに帰ってくる前に、色々調べてたら、その時で(愛南町の人口が)二万三千人くらいだったんですよ。どんどん減っていつてるとことは、いつかは絶対に二万人切るのには目に見えている。それ(そういう状況)で皆果たしていいのかなってすごい思う訳ですよ。今まで自分たちが育ってきたこの町が、もしかしたら、例えば宇和島とかに合併されて、そもそも愛南町というもの自体がなくなるんじゃないかと。そういう不安が正直あるんです。』

この様に、C氏は、この地域全体が消滅するかもしれないという状況に対して強い危機感を抱いていた。ただし、それと同時に、周りの方々がそうした状況に危機感を持っていない事を危惧されていた。

『だけど、それ(地域の危機)を皆分かっているのかなって、すごく思ってる。』

この事に関連して、C氏は、二年前にこの町に戻ってきてから参加したまちづくりの住民ワークショップでの体験を話して下さった。

『その時に、それこそ二十歳くらいの若い方から年配の方までいらっしゃったんですよ。それぞれ各グループに分かれて意見言ってたんですよ。でも、大体の人が的を外したことしか言わないんですよ。居酒屋を作るとか言ってるんですけど、まずありえないんですよ。居酒屋を作ったってただの近所の集まりになってしまっても何も面白くない。人も集まらないだろうし。僕

『これはダメだと思って、それ以降参加してないんです。』

この時、C氏は、空き家対策等の土地の有効活用について意見を述べたそうだが、ワークショップの中では取り上げられなかったとのことである。ただし、C氏は、自分が始めた農業が軌道に乗った際には、今後も町の取り組みに関わりたいたいとのことであった。

『まず（農業の）下地を作ってから。僕は今自分の仕事が精いっぱいだし、自分のやるべきことは自分の仕事だろう（と思います）。それがメイン（の仕事）なんで。もう少し（仕事が）落ち着いてくれば、その辺（まちづくり）も考えていきたいなどは思っています。』

4.3 C氏に対する追加インタビューの内容

以上、C氏の言説より、同氏が当該地域の将来的な存続に強い危機感を抱いている様子が見て取れる。一方で、当初のインタビューだけでは、C氏がそうした危機感を持つに至った経緯や背景については十分に窺い知ることが出来なかった。具体的には、以下のような疑問点が挙げられる。

- なぜC氏は、松山での仕事を辞めて、自分の生まれ故郷で農業を営む道を選んだのか。
- なぜC氏は、当該地域が将来的に存続できなくなるかもしれないとの可能性を、現実起こり得る事として切実に認識するに至ったのか。
- 地元で農業を営むにあたって、2年間、どのようなプランを練ったのか。

これらの疑問点は、C氏がどのような経緯で地域の存続に危機感を抱くようになり、その危機にどのように対峙しようとしているかを理解する上での重要な鍵となり得る。そこで、これらの疑問点を中心に、改めて追加的インタビューを実施した（2017年8月7日）。以下、その結果を述べる。

まず第1の疑問点に関連して、C氏は、松山で働いていた20代の頃は、愛南町やX地域について特に意識することは無く、地元にも時折帰省する程度であったそうである。ただ、30代に入り、地元に住んでいる友人から、高校のクラスが10クラスから4クラスへと大幅に減っていることを聞いた事が、愛南町の現状について考える大きなきっかけとなった。それから愛南町の人口が急速に減少していることを知り、率直に『やばい』と感じ、その様な現状に対して強い懸念を抱いたそうである。

『人口減少というのが僕の中ですごく引っかかったんです。少しでも愛南町という町を存続させるのであれば、やはり人口減少が一番いかんことやし、ましてや働き口が無いっていうのもいかんことや（と思った）。（中略）そもそも何で若い人達がこの町を出て行くのかと言え

ば、やはり働き口がないからだと思うんですね。でも、せっかくこの町で生まれて、しかも自分の町が嫌いっていう人はそうそう居ないのに、仕事がないからこの町に住めないなんて相当可愛そうやなって思っ。』

そこで、C氏は

『何とかせないかん』

と考えるようになったそうである。そして、ちょうどその当時、松山市を中心に国内では珍しいアボガド栽培の開発が進められている事を知り、農業の新たな可能性を感じていたこともあって、自分も愛南町に帰って農業を始めて、ゆくゆくは地域の雇用にも貢献したいと強く思うようになったそうである。

ここで、第2の疑問点と関連して、C氏が愛南町の減少に対して危機感を募らせた背景には、2004年に旧4町1村（御荘町、一本松町、城辺町、西海町、内海村）の合併によって愛南町が誕生した時の体験が少なからず関係していたそうである。同氏によれば、この時、自分の生まれ育った故郷が消えてしまったという印象を抱いたとのことであった。

『気付いたら（町の名前が）変わってたんですよ。自分の住所も変わってて、すごい違和感というか、嫌だなと思った。（中略）自分のまちが無くなっちゃったと思ったんですよ。』

こうした過去の体験があったからこそ、C氏は、前節で述べた通り、このまま愛南町の人口が減少し続けた場合、この町自体が近隣の自治体に合併されてしまう可能性についても、決してあり得ないことではないと切実に受け止めておられた。それ故、C氏は、

『僕がどうあがいたところで、この先、人口が減っていくのは食い止められないだろう』

と理解しつつも、

『自分の生まれ故郷が無くなるという体験を二度と繰り返したくない』

との思いの下、

『まずは一人でも人口が増えるように、まず、俺帰ろうって思った。（中略）僕自身が愛南町に帰って農業をしよう。さらに農業の規模を拡大して、雇用できる環境にしよう』

と決意するに至ったそうである。

ただし、第3の疑問点に関して、C氏は、故郷への思いを募らせながらも、すぐに地元へ戻って来たわけでは

ない。同氏は、この町で農業を始めるに先立って、まず自分に出来ることは何かを考え、以下の通り、その具体的な準備や計画を一つ一つ進めていったそうである。

- 実家の所有する農地面積が限られていたことから、周辺の農地を買い取り、農業の規模を拡大することとした。
- 両親が兼業で育てていた米だけでは暮らしていくことが難しいため、新たに収入源になり得る農作物を調べた。その結果、米栽培に加えて、河内晩柑と生姜の栽培に本格的に取り組むこととした。
- 農産物の加工・販売を行う会社を設立する。地元の農協で働いていた兄を雇い、技術的な指導を仰ぐ。将来的には若手を雇用する受け皿となるようにする。

以上の計画の下、C氏は、2014年よりこの町で農業を開始した。一年目は、農機具の購入等でそれまでの貯金を殆ど使い切ったこともあり、お金の工面に苦勞することが多かったそうである。ただ、それから3年が経過する中で（2017年8月時点）、実際に会社を設立すると共に、農地も実家が元々所有していた面積の七倍にまで拡大した。河内晩柑と生姜の栽培も順調に進み、松山時代に培った営業能力も活かしつつ売れ行きも好調とのことであった。

以上のことから、C氏が当該地域の人口減少という厳しい現実を知ったことを一つのきっかけとして、過去の体験に照らしながら、この地域が将来的に存続できなくなるかもしれないという可能性を先駆的に認識するに至ったものと解釈できる。同時にC氏は、地域の存続に向けて自分一人で出来ることには限りがあると感じながらも、その出来ることを地道に準備・実践しながら、その危機に対して「人事」を尽くしてきたことも、今回のインタビュー内容から窺い知ることが出来る。

4.4 言説分析と考察

4.4.1 言説内容の比較分析

以上、地域の存続を巡る不安に関して、3名の方々の言説を取り上げた。その内容から、どの方においても自分達の地域やコミュニティが衰退しつつある現状を一定程度認識している様子が伺える。しかし、B氏においては、そうした認識を持ちながらも、そこに「不安を持つことはない」という主旨の発言をされていた。この発言は、その際にご自身が高齢であると述べている点も併せて考えると、地域の存続を巡る不安を抱えるには、当人には余りにもその負担が大きいことを示唆するものと解釈できる。この点については、別の方が『気が滅入るから、あえて不安に感じないようにしている』と述べていたことから、こうした解釈にも一定の妥当性があるものと考えられる。従って、以上の解釈が成立するならば、B氏の「不安を持つことはない」という発言は、地域の存続を巡る不安が、当該地域に住む人においてその不安を抱えることを忌避する程、容易に克服することが出来ない根深い

ものであることを却って浮き彫りにするものと考えられる。

一方、C氏は、地域存続の不安に対して他の方々とは異なる向き合い方をしているものと考えられる。C氏もまた、インタビュー冒頭にて地域の暮らしの中で不安に思うことは『一切ない』と述べていたが、ご本人も認めているように、当該地域が将来無くなるかもしれないことについては不安な気持ちを抱いていた。それでは、なぜC氏は不安に思うことは『一切ない』と発言したのであろうか。この事を理解する上では、C氏がこの発言に続いて『何かしら不安があれば帰って来てない』と述べている点に着目すべきであろう。前述の通り、C氏は、この町に帰って来るに先立ち、地域の現状を調べると共に、そこで農業を営むための準備を入念に重ねてきた。C氏は、そうした準備を経て十分な「覚悟」が出来たからこそ、厳しい実情にあることを承知の上で、この町に帰って来るという決断に至ったものと考えられる。すなわち、C氏の決断の背景には、この地域が消滅するかもしれないという可能性に対する先駆的な「覚悟」があったものと言える。そうであるからこそ、C氏にとって、この地域の存続に対して「不安を持つ」と安易に認めることは、自らの「覚悟」を否定することにもなり兼ねず、それ故、不安は『一切ない』と発言した可能性が考えられる。しかし、そうした覚悟の背景には、自分が育ってきた町が無くなるかもしれないという根本的な不安があったことが、C氏の発言から伺える。C氏においては、そうした不安が明確な危機感となって自らの「覚悟」を決めるに至ったものと考えられる。

この様に、地域社会の存亡という危機的事態に対して、B氏とC氏の間で異なる不安への向き合い方が見られた。すなわち、B氏に代表されるケースでは、その精神的・肉体的な重荷故に地域の存続を巡る不安と向き合わない一方で、C氏においては、その「覚悟」故にそうした不安と向き合うものと解釈された。ただし、以上の分析より、前者にあっては、地域存続の不安と向き合わないことが、却ってその不安の根深さを暗示するものと考えられた。一方、後者にあっては、C氏の強い「覚悟」の根底に、地域の消滅に対する根本的な不安が暗示されているものと考えられた。この様に、いずれの場合においても、地域の存続を巡る不安が、住民にとって相当の「覚悟」を要する根深いものである可能性が示されている。

4.4.2 不安の弁証法的展開

上述の議論の通り、C氏の言説より、地域の消滅という危機的事態に対する同氏の先駆的な覚悟が感じられる。インタビュー調査の中でC氏が述べていた通り、同氏は、現在、農業という自らの仕事を軌道に乗せることに専念しており、愛南町やX地域のまちづくり活動等に直接的に関わっている訳ではなく⁽⁶⁾、更には少なくとも現時点において、例えば、羽鳥他（2010）が論じた“カリスマ”の様に、実際に地域づくりを成功に導く活動を為した訳ではない。ただし、見方を変えれば、そうした一般の方

においても、地域の課題に取り組もうとする明確な覚悟や意志が見られたことは、地域の存続に向けた確かな“望み”が存在する可能性を含意するものと捉えられる。

しかし、C氏自身が以前は当該地域に対して特に意識することは無かったと述べていることから分かる通り、C氏は最初からこうした覚悟を抱いていた訳ではないようである。それでは、同氏はいかにして地域消滅の危機的事態を先駆的に覚悟するに至ったのであろうか。この問題について、以下では、キルケゴールが論じた不安の概念に改めて着目しつつ、C氏が地域の消滅に対する覚悟を持つに至った経験について、それを根拠付け得る仮説的な説明を試みる⁽⁷⁾。

さて、キルケゴールによれば、不安は自己の生の可能性との関係において常に弁証法的な両義性を有すると論じられている。この点に関して、キルケゴールは、「不安は或る共感的な反感であり、そうして、或る反感的な共感 (p.69)」と述べている。すなわち、人間の生は、不安から逃れたいと欲する一方で、他方ではその不安の中にありたいと欲する。そして、この両義性において、人間の生がその不安を克服しようと実践する中で、不安の度合いが弁証法的に深まっていくものと論じられている。この点を踏まえるなら、C氏において、地域社会の存続を巡る不安と真摯に向き合い、それを乗り越えようとする中で、地域が常に消滅し得る危険性を孕んでいることを理解し、その危機的事態に対する覚悟を持つに至った可能性はあり得るものと考えられる。C氏にあっては、そうした弁証法的展開を経て、地域の存続を巡る不安がより切実な危機感を伴った覚悟へと深化したものと捉えられる。

ただし、今回の調査対象者の中でそうした弁証法的深化の可能性が垣間見れたのは、C氏の言説に限られていた。このことから分かるように、地域の存亡を巡る住民の不安が必ずしもその危機に対する覚悟へと弁証法的に深化するとは限らない。それでは、地域の存続を巡って不安から覚悟へと至る弁証法的深化は、どのような前提や条件の下で駆動するのであろうか。無論、C氏へのインタビュー内容だけでは、この問いに対する十全な解答を導くことは困難であろう。ただし、少なくともC氏の言説を見る限り、同氏が地域存続の危機に対する覚悟を持つに至った背景には、まず、町村合併により自分が生まれ育った町が無くなったという過去の体験が少なからず関係している可能性が考えられる。すなわち、C氏において、こうした過去の体験を強く記憶していたが故に、現在の地域や社会もまたいつ何時消滅しないとは限らないことを明瞭に認識し得たものと考えられる。このことは、「地域の消滅」にまつわる過去の体験や経験が、「地域の消滅」に関する将来の可能性への先駆的な覚悟を抱く上での重要な契機になり得ることを示唆している⁽⁸⁾。

ただし、愛南町への合併の経験は、それを「地域の消滅」と捉えるか否かは別として、C氏に限らず、多くの調査対象者において共有されているところである。さらに、今回の調査対象者の多くは、自分達の住む地域が衰退し

つつあるとの認識を一定程度有していたことも、前述した通りである。しかし、それでも地域が将来的に消滅するかもしれないという不安は、その精神的・肉体的な負担が極めて重いため、多くの住民においては、そうした不安に向き合うことを忌避する傾向が見られた。そうした中で、C氏のみが、地域存続の危機に対して『何とかせなかん』と考え、自らが地元に戻るといって一人にとっては相当に重い決断を為した点に着目すべきであろう。前節で述べた通り、C氏にとって、この地元に戻るといって決断は、地域の消滅という危機的事態に対する明確な覚悟に裏打ちされたものであった。ただし、C氏は、その決断に先立って、地域の現状を調べると共に、自らが農業を始める上での綿密な計画を立てる等、様々な準備を重ねてきたことも見過ごすべきではない点であろう。すなわち、C氏にあっては、地域の存続という大きな問題に最初から無計画に取り組むのではなく、まずは自分の出来る事は何かを考え、それを地道にそして慎重に準備・実践に移していったものと捉えられる。この意味において、同氏は、地域存続の危機に対して、自分の出来る事から、言わば小さな「生の決断」を一つ一つ重ねてきたものと解釈できる⁽⁹⁾。そして、こうした自らの意志を伴う「生の決断」を弛まず続けていく中で、地域消滅の可能性に対する覚悟が少しずつ固まり、自らが地元に戻るといって一つの決断に至った可能性が考えられる。

無論、地域の存続に向けた自らの小さな決断は、その字義の通り、その一つ一つは地域の存続に微々たる寄与しか及ぼし得ない。しかし、当人においては、そうした決断を自らの意志に基づいて為す度に、少なくとも地域との関わり合い（コミットメント）が強まることは間違い無く、それ故、その都度、地域存続の不安と向き合うことの負担が軽減されるものと想像される。この点を踏まえると、こうした「生の決断」の積み重ねを通じて、地域の消滅という危機的事態に対する覚悟を持つに至るという可能性は有り得るものと考えられる⁽¹⁰⁾。

以上の議論から、地域の存続を巡る漠然とした不安がその存続に向けた覚悟へと弁証法的に深化する背景には、「地域消滅」にまつわる過去の経験とその存続に向けた自らの「生の決断」の弛まぬ実践という2つの要因が働いていた可能性が示唆される。前者は、地域が消滅する可能性に対する現実的な認識や想像力を増進させる条件であり、後者は、そうした現実認識による不安の精神的・肉体的な負担を軽減させる条件であると言える。特に、「地域の消滅」という可能性は、その地域の置かれた状況が深刻であれば尚一層、そうした可能性を認識する当人にとっては、その不安から逃れたい程の“絶望”的な状況に他ならない。しかし、そうした状況にあっても、地域の存続に向けて、自分に出来ることは何かを考え、その具体的な実践を地道に重ねる中で、自らの不安と向き合い、その“絶望”を乗り越える“希望”を見出す契機が生まれるものと考えられる。この様に、「地域の消滅」に関する現実認識を抱きつつも、「地域の存続」という“希望”に向けて「生の決断」を重ねることを通じて、地域

の存亡を巡る“絶望”を弁証法的に乗り越えることが可能となり得る。そして、この弁証法的な実践プロセスを重ねることを通じて、地域の消滅に関わる不安が、過度な“楽観視”や、その反対に“絶望”や“諦め”に転化することなく、その先駆的な覚悟へと深化する可能性が、以上の議論より含意されている。逆に言えば、「地域消滅」にまつわる経験やそうした事態に対する想像力を一切持ち得ず、その存続に向けた具体的な決断が何一つ為されなければ、地域の存続を巡る不安は、いつまでも漠然とした域を出ず、場合によっては“絶望”や“諦め”に転化してしまい、確固たる覚悟へと深化することは難しいものと考えられる。

5. まとめ

本研究では、キルケゴールが論じた不安の概念を踏まえて、地域住民の言説から、地域の存続を巡る存在論的不安の実態を明らかにすることを試みた。その結果、住民において、たとえ地域が衰退しつつあるとの認識を有していたとしても、その精神的・肉体的負担故に、そうした危機的事態やそれに対する不安に必ずしも向き合うとは限らないことが示された。その上で、地域の消滅の可能性を認識した上で、当該地域に帰り農業を始めた方の言説に着目し、その経験を基にして、地域の存亡を巡る不安がその危機に対する先駆的な覚悟へと弁証法的に深化する可能性について議論した。そして、こうした不安の弁証法的深化は、過去の経験に裏打ちされた「地域の消滅」に関する現実認識の下、地域の存続に向けて自分が為すべき事の「生の決断」を地道に重ねていく中で成立し得ることを指摘した。

5.1 地域存続を巡る存在論的不安の全体関係

図2では、本研究の議論を踏まえて、地域存続を巡る存在論的不安の全体関係を改めて整理している。まず、地域やコミュニティが衰退しつつある状況に対して不安

が芽生え、その不安から地域存続への「心配」や「願望」が生まれるものと考えられる。こうした「心配・願望」は、A氏をはじめ多くの調査対象者において確認された。さらに、C氏の事例に見られるように、地域存続を巡る不安は、当事者がその不安と向き合う中で、こうした危機に対する先駆的な「覚悟」へと弁証法的に深化する可能性がある。そして、こうした弁証法的深化に伴って、当事者が「自己の不安」として配慮する領域は、「いま・ここ」の狭い範囲から長期的かつ地域全体を見据えた範囲へと拡大するものと考えられる。この点については、C氏において、地元が衰退しつつあるとの現状を認識した後、徐々に当該地域全体の将来的な可能性について考えるようになったことから推察できるところである。ただし、繰り返し述べる通り、今回のインタビュー調査においては、この様に自らの視野を広げながら、地域全体の危機的事態に対する先駆的な「覚悟」を持つに至る弁証法的展開の可能性が感じられたのは、C氏の言説に限られていた。この事は、地域存続を巡る不安がその消滅危機に対する先駆的な「覚悟」へと弁証法的に深化することの難しさを改めて含意するものと言える。そして、そうした弁証法的深化が成立し得る条件として、「地域消滅」にまつわる過去の経験や、地域存続に向けた「生の決断」とそれに伴う不安の精神的・肉体的負担の軽減があり得ることも、前述した通りである。その一方で、当事者において、こうした弁証法的深化が成立せず、自らの不安と向き合うことを止めた場合、地域存続を巡る不安は、その将来的な存続に対する「諦め」や「失望」に転化する可能性が考えられる。

なお、図2に示す全体的な関係図は、あくまでも今回の調査対象者の言説を踏まえて整理したものであり、地域存続を巡る存在論的不安のパターンやその当事者間の相違を説明し得る包括的・体系的な説明原理や概念構成を導き出す上では、本研究のインタビュー調査で得られた経験事例だけでは十分とは言い難いところである。特

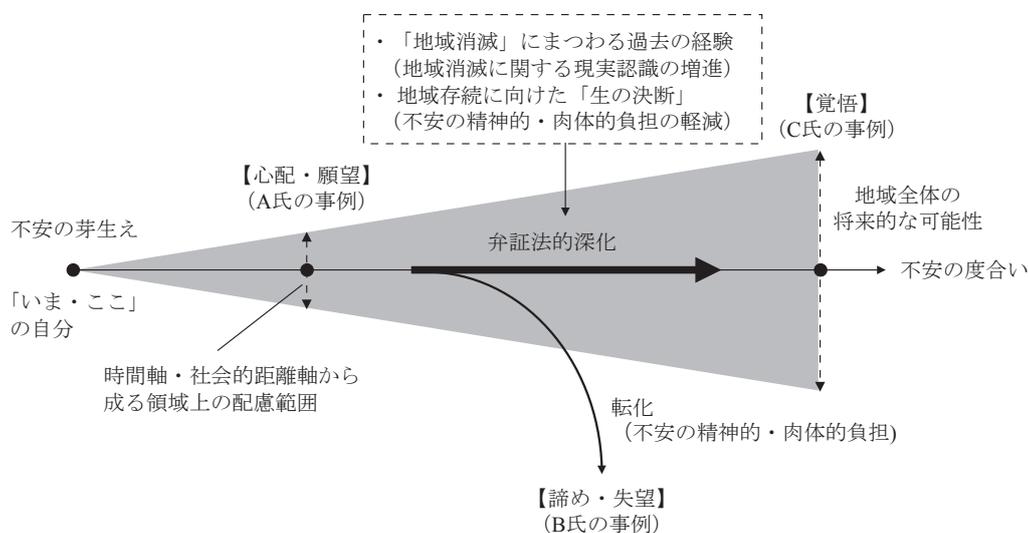


図2：地域存続を巡る存在論的不安の全体関係図

に、地域存続を巡る不安の弁証法的展開については、1つの経験事例のみに基づいており、更なる検討が必要である。本稿最後に述べるように、この点については今後の課題としたい。

5.2 本研究の実践的含意

本節では、本研究の知見が地域やコミュニティの諸実践やその活力増進に向けて示唆する実践的含意を考察する。

第1に、地域においてその活力増進に向けた諸実践が生まれる上では、当該地域の存続を巡る住民の不安を一面的に解消するのではなく、むしろ住民が抱える不安が当該地域の消滅に対する先駆的な覚悟へと深化する弁証法的展開を促進することが重要であると考えられる^(11,12)。この点において、本研究の考察内容を踏まえるなら、そうした不安の弁証法的深化の条件として、第1に、地域が実際に消滅する可能性があり得ることを現実的に認識することが重要であると言える。そのためにも、C氏のケースからも示唆されるように、実際に地域が消滅してしまった体験や事例を、現実に関わり得る事として住民間で共有すること等が考えられる。ただし、「地域の消滅」に関する経験や事例は、それだけでは、地域住民において過剰な不安を抱かせることにもなり兼ねない。実際に、近年の地方消滅論に対する批判として、「地方消滅」という言葉やその喧伝が、住民に対して過度な不安を煽り、場合によっては、「諦め」を蔓延させ兼ねないことが指摘されている(c.f. 伊地知, 2017)。そこで第2に、地域やコミュニティの活力増進に向けて、自分達で出来る事から具体的な準備を進め、一つ一つの決断を重ねて行くことが、地域存続に関わる不安と向き合うことの負担を軽減する上でも重要であると言える。特に、地域がいかにかその存続の危機に陥っていたとしても、その危機を直ちに克服することは実質的に不可能に近い。むしろ、地域住民一人一人が自分達で出来ることが何かを考え、その実践に地道に取り組むことが肝要であると言える。その上でも、例えば、地域づくりに関わるワークショップ等の取り組みにおいても、なるべく問題提起や政策提案だけに留まることなく、地域課題の解決に向けて自分達で出来ることから少しずつでも実践するように促すことも重要であると言える。そうした決断と実践の積み重ねがあつてはじめて、地域を自分達で守ろうとする覚悟が当該地域の中で芽生えていく可能性が生まれるものと考えられる。

第2は、地域住民が抱える不安を把握するための方法論に関してである。近年、「安全・安心の社会」を目指して、地域住民がどのような不安や心配を抱えているかについて、アンケート調査等により定量的に把握しようとする研究事例や実務事例が少なくない(e.g. 福山・桑野, 2015; 内閣府, 2014)。これらの事例は、住民の不安の程度やその要因を明らかにすると共に、不安低減に向けた施策を検討する上で重要な示唆を与え得るものと言える。ただし、既往研究では、住民にとって「不安である」ことがどのような意味を有しているかについては十分に検

討されていない。今回の調査においても、例えば、B氏とC氏は共に、地域の暮らしの中で「不安がない」と述べていたが、その意味するところは大きく異なる可能性が示された。しかし、そうした「不安であること」の意味については、必ずしもアンケート調査だけでは捉え難いものと考えられる。この点を踏まえると、地域住民が抱える不安の意味を理解する上では、そうしたアンケート調査と共に、本研究で着目した様な住民の語りの中から、住民が「どのように不安を生きているか」をその経験に即して理解することが重要である。

5.3 今後の検討課題

最後に、本研究の課題について述べる。

第1に、本研究では、地域の存続を巡る不安がその先駆的な覚悟に深化する弁証法的展開の可能性について議論したが、本稿の議論は、あくまでも一名の調査対象者の言説を基に検討した一つの“仮説”にしか過ぎない。今後、こうした弁証法的深化の実態について更なる理解を深める上では、様々な地域や住民を対象とした事例調査や継続的な調査を実施し、その経験的な知見を蓄積することが重要である。また、不安の弁証法的深化の条件についても、本研究で指摘した2つの条件以外にも、当人の社会・生活環境や各種の経験等、様々な要因が関連している可能性がある。今後は、地域の存続を巡る存在論的不安やその弁証法的深化についての哲学的な考察を重ねると共に、そうした個人的・社会的要因との関連性を実証的或いは事例記述的に検討し、地域消滅に対する覚悟への弁証法的深化のプロセスについて、更なる理解を得ることが重要な課題である。

第2に、地域社会の将来的な消滅に対する先駆的な覚悟の下、その危機的事態を克服するための公的実践の支援・促進に資する処方的な方法を検討することも重要な課題である。例えば、本研究で指摘した様に、「地域消滅」にまつわる過去の経験を住民間で共有することや、地域存続に向けて自分達で出来る事から実践活動を開始すること等が考えられる。こうした取り組みを通じて、地域の存続に関わる漠然とした不安がその危機と向き合う明確な覚悟へと深化するかどうかを検証することも重要な課題である。

注

⁽¹⁾ こうした態度は、自らの不安を孕んだ運命から目を背けず、その全てを受け入れようとするという意味において、ニーチェが論じた「運命愛」と通低するものと考えられる(藤井・羽鳥, 2014)。

⁽²⁾ こうした考え方は、その「非人格性の倫理」の体系において、人間の「意識の流れ」を「時間軸」(「現在(“いま”)」-「将来・過去」)と「社会的距離軸」(「自分(“ここ”)」-「他者」)より構成される領域上の配慮のパターンとして捉えた Parfit (1984) や、同様の領域を想定した上で、そこでの焦点化の傾向性として社会的ジレンマを定義した藤井 (2003) に依拠している。

- (3) Fisher (1989) では、個別状況における不安の構想的記述の作成例として、ある青年の信仰上の不安に関する以下の記述が挙げられている。

「この被験者にとって、次のような事態により不安になる可能性が生じた。すなわち、一人の他者とともに、両義的ではあるが情熱的に一つの状況を作りだした。その状況は、彼に自分の欲していたことを覚らせると同時に、彼自身を友人と信仰に対する裏切り者であり恥すべき偽善者とする状況でもあった。彼にとって、不安であることは次の状態を意味した。すなわち、彼は妥協不可能な行動の選択に直面して立ちすくんだ。そして、彼は自分が麻痺するという身体的症候を経験した。また、彼は自分の欲求を実行に移すことも、積極的に友人と信仰を守る立場に立つことも出来なかった。不安である状態は、少なくとも一時的にはあるが、その状況から無意識に飛躍することによって回避された一すなわち、彼は気を失った。」(Fisher, 1989, p.134)

- (4) Fisher (1989) が提示した不安の一般的な構想的記述は、長文のため全てを記載することは出来ないが、その一部を以下の通り抜粋する。

「不安な状況は、自分が本当に依拠していた自己理解 (self-understanding) が疑わしく不確定となり、それ故、真実でないようになった時に生起する。この状況には、2つのタイプがあり得る。第1のタイプは、その自己理解の本質的な要素、すなわち、自分が実現しようと努力してきた自己像が今や恐らく達成できないものとして経験され、自分が生きてきた自己理解全体が疑わしいものとなることを意味する。第2のタイプは、自分が決して真実でないものとして、あるいはもはや真実でないものとして完全に排除していた事柄が、真実かもしれないものとして立ち現れ、そのため、そうした絶対的な排除に基づいて成立し得た自己理解が根底から崩される状況を意味する。いずれの状況においても不安であることは、当人がその存在の契機を突然失い、障壁に直面する感覚やそれにも関わらず完全に前に進めなくなる無力感を味わうことを意味する。」(Fisher, 1989, p.134)

- (5) 例えば、ある調査対象者 (30代女性) の記述内容を以下に示す。

「小学校の児童の数が減っており、子供のスポーツチームの編成にも苦慮しており、心配に感じている。他のチームやクラブからも勧誘を受けることがあるものの、現在のチームを抜けるのも気が引けるため、子供には理解してもらっているようである。

また、地域や小学校のイベントの際、保護者としての負担を感じている。元々この地域の生まれではないため、勝手がわからず、戸惑うことも多いようである。秋祭りの係りを担当した時も、例えば、みこしの順路

が分からず苦勞された。特に、この地域では、男性の方が意見を言う傾向が強く、集会に出ても男中心に進行するため、肩身が狭く感じることもあるようである。地域内では雇用機会が殆どないため、子供は将来的にこの地域を出て行くと考えている。ただし、里帰りした時に、自分達が学んだ小学校や地域の行事がなくなっていると寂しく感じることを懸念されている。子供達の為にも、何とか残してやりたいと願っている。」

- (6) ただし、地域の中で農業という生業を立てること自体が、地域社会の活力増進と直接的に結び付く実践活動と言っても過言ではない。

- (7) なお、本アプローチは、パースによって提唱されたアブダクション (abduction) に基づいている (米盛, 2007)。ここで、アブダクションとは、一般に、ある観察事実を前提にして、その観察事実が生じる理由を説明付けるような仮説を導き出す推論形式を指す。以下では、こうしたアプローチに基づいて、「C氏がいかにかして地域の消滅に対する先駆的な覚悟を持つに至ったのか」について説明可能な“仮説”を探索的に検討する。

- (8) 藤井・羽鳥 (2014) において、自分自身の「死」に対する先駆的覚悟性が、「死」にまつわる経験により増進する可能性が示されている。この点を踏まえると、地域の存続という文脈においても、地域の「消滅 (死)」に対する先駆的な覚悟が、こうした「消滅 (死)」にまつわる経験によって増進する可能性はあり得るものと考えられる。

- (9) 一般に「生の決断」とは、自己の生の可能性を前にして、常に「あれか・これか」の選択を迫られている中、自らの生を形作る一つの決断を為すことを指す (Ortega, 1932)。

- (10) この点は、山本常朝 (1940) が『葉隠』の中で唱えた「大事の思案は軽くすべし、小事の思案は重くすべし (p.41)」という教えと通低するところがある。すなわち、日常において地域の為に自分自身で出来ることは何か (小事の思案) について深慮し、その小さな決断と実践を重ねることが大事であり、その中でこそ、地域が将来的に消滅し得るといふ危機的事態 (大事の思案) を先駆的に覚悟することが出来るものと考えられる。

- (11) 特に、地域やコミュニティは、それが住民相互の共同行為によって自律的に存立する“生き物” (有機体) であると考えられる以上 (c.f. 藤井, 2008)、常に消滅 (“死滅”) する危機を内在していると言える。この点を踏まえると、地域の存続を巡る住民の不安を一面的に解消することは、そうした危機を克服するために住民自身が主体的に対処しようとする活力を低下させ、引いては、地域社会の強靱性を損なわせることにもなり兼ねない。

- (12) 藤井 (2012) において、より一般的な観点から、社会がそのリスクに対処する上で、我々一人一人が自分自身の究極的な将来の可能性である「死」に対する先駆的覚悟性を持つべきであることが論じられている。

引用文献

- Dustin, D. (1969). *How psychologists do research: The example of anxiety*. Prentice-Hall.
- Fischer, W. F. (1989). An empirical-phenomenological investigation of being-anxious. In: R. S Valle and S. Halling (Eds.). *Existential-phenomenological perspectives in psychology* (pp. 127-136). Plenum.
- 藤井聡 (2003). 社会的ジレンマの処方箋. ナカニシヤ出版.
- 藤井聡 (2008). 土木計画学—公共選択の社会科学—. 学芸出版社.
- 藤井聡 (2012). リスクに社会はどう相対すべきか. 中谷内一也 (編著) リスクの社会心理学 (pp.215-236). 有斐閣.
- 藤井聡・羽鳥剛史 (2014). 大衆社会の処方箋—実学としての社会哲学—. 北樹出版.
- 福山敬・桑野将司 (2015). 山陰地方およびその周辺中山間地域における生活不安感の要因に関する研究. 都市計画論文集, Vol. 50, 892-897.
- 羽鳥剛史・藤井聡・住永哲史 (2010). “地域カリスマ”の活力に関する解釈学的研究—インタビューを通じた「観光カリスマ」の実践描写—. 土木技術者実践論文集, Vol. 1, 122-136.
- 伊地知恭右 (2017). 地方消滅・地方創生論における思想を探る. 実践政策学研究, Vol. 3, No. 1, 91-104.
- キルケゴール (1951). 不安の概念. 岩波文庫. (original work published, 1844)
- 国土交通省 (2011). 安全で安心して暮らせるまちづくり推進方策報告書 (社会資本整備審議会都市計画部会).
- 米盛裕二 (2007). アブダクション—仮説と発見の論理—. 勁草書房.
- 増田寛也編著 (2014). 地方消滅—東京—極集中が招く人口減—. 中央公論新社.
- 増田寛也・人口減少問題研究会 (2013). 特集 壊死する地方都市—戦慄のシミュレーション 2040年, 地方消滅. 「極点社会」が到来する—. 中央公論, Vol. 128, No. 12 (2013年12月号), 18-31.
- 内閣府 (2014). 国民生活に関する世論調査.
- 日本学術会議 (2005). 安全・安心な世界と社会の構築特別委員会報告「安全で安心な世界と社会の構築に向けて—安全と安心をつなぐ—」.
- 小田切徳美 (2014). 「農村たたみ」に抗する田園回帰. 世界, Vol. 860, 188-200.
- Ortega, J. (1932). *The revolt of the masses*. New York, W. W. Norton & Company. (オルテガ・イ・ガセット, 神吉敬三 (訳) (1995). 大衆の反逆. ちくま学芸文庫)
- Parfit, D. (1984). *Reasons and persons*. Oxford University Press. (デレク・パーフィット, 森村進 (訳) (1998). 理由と人格—非人格性の倫理へ—. 勁草書房)
- 山本常朝 (1940). 葉隠 (上・中・下). 岩波書店.
- 山下祐介 (2014). 地方消滅の畏—増田レポートと人口減少社会の正体—. ちくま新書.

Abstract

Many local and mountainous areas in Japan are facing a severe crisis of existence as a result of a population outflow. This study is aimed at understanding the reality of residents' existential anxiety about the future survival of their area on the basis of a theoretical concept of anxiety developed by the Danish philosopher Kierkegaard. An interview survey targeting the residents ($n = 60$) of a mountainous area in Ehime Prefecture was conducted to understand how they felt anxiety about their locality's survival and what they experienced while they were anxious. The survey result indicates that residents might not always confront with their own anxiety due to their spiritual as well as physical burden, even though they knew that the number of local areas are declining. Focusing on the experience of one person who returned back to this area and started a new agricultural business while knowing the crisis of existence of the area, this study discusses the possibilities that anxiety about the survival of local areas in future will increase dialectically to the spirit of anticipatory preparedness for the crisis. Then, it highlights that such a dialectical progress can be realized through a realistic recognition with regard to “extinction of local areas” based on previous experience and continuous “decisions of life” toward the survival of the localities. Finally, based on the findings, the way to promote practices of regions and communities and their revitalization are discussed.

(受稿：2017年9月1日 受理：2017年11月25日)